

クリーンルームの暗殺者

プロローグ オロジアの首都クワス

北欧に位置するオロジアの首都クワスの夏は短く冬は早い。

爽やかな陽光に照らされていたあの心地良かった一時の夏も過ぎ、今や空は重苦しい厚い雲に覆われていた。

高級軍人にあてがわれた運転手付きの黒塗り大型セダンの重いドアを開いてステファン・シュワルコフ大佐が路上に降り立った時、肩に一片の雪が舞い降りた。

重苦しい雰囲気は空模様だけでは無い。

「この沈鬱な雰囲気はなんだ！」

シュワルコフ大佐が心の中でつぶやいた。

最も華やかな商業通りを外れているとは言え、仮にも一国の首都の日中の通りだと言うのに、静まりかえり行きかう車も人もほとんど見られない。たまに歩行者の姿を見かけても俯きがつくりと肩を落とし、自信も希望も失ったかのように、当ても無くとぼとぼと歩を進めているだけだった。

もうすぐ二十一世紀を迎えようというのに街には祝賀ムードはなく、ただ重苦しい陰気な空気だけが支配していた。

通りに沿ってしばらく歩いて行くと奇妙な形をした新興宗教の礼拝堂が建設されている光景が目に入った。

数ブロック先では復活した正教会の伽藍の建設の槌音が聞こえて来て、特徴ある玉葱型のドーム屋根が天に向かって伸びていくのが見える。

耳を澄ますとさらに遠くの方からも建設音が聞こえて来るようだ。

「昔はこんなでは無かった！」再び心の中でつぶやいた。

「昔は国民の全てが明るい希望を持ち、建国の意思に燃え一所懸命に働いていた。宗教などは不要のものだった。宗教などに縋るのは精神的墮落だ！」と思った。

「なんとかしなければならぬ。政府が国民に仕事と希望を与えないから、国民は宗教などという邪悪なまやかさに逃避してしまうのだ！」と心の中で強く念じるのだった。

尾行されていないことを慎重に確認すると、通りから路地を幾つかめぐり、とある一軒の古い石造りの建物の前に立ち止まって、重い木の扉を開いて中に入った。

「遅かったじゃないか、ステファン！」

部屋の正面のソファに腰掛けたピョートル・ヘイグ大佐が赤い顔で声を掛けて来た。

「全く酒の放せない男だ。」とシュワルコフ大佐は心の内で呟いた。待っている間に強いウオッカをあおっていたのだろう。

ヘイグ大佐が言うように本日の主要メンバーは全て集まっているようだ。

「情報を集めていたので、遅れてしまいすまなかったが、おかげで良い情報が得られた。」シュワルコフ大佐がメンバーを前にして話し始めた。

「あの政変以来、政権を篡奪し国民生活を混乱に陥れたカミンスキー大統領の訪日のスケジュールを入手できた。」

左右を囲んだ仲間をぐるりと眺めると、手提げ鞆から何枚かのコピーを取り出し机の上に広げた。

「これまで、カミンスキー大統領を排除するため、我々の同士が幾多の暗殺計画を実行して来たが、奴の強力な警護部隊の働きでことごとく失敗している。」

シュワルコフ大佐は苦い過去の失敗を思い出しているのか苦しげな表情を浮かべると、一呼吸おいて、また静かに話し始めた。

「しかし日本では話が違う。奴も日本の公安には遠慮して、オロジア国内のように警護部隊を派手に動かすこともできないだろう。・・・そして面白いことに・・・」と、一呼吸おいて、ニヤッと頬を歪めると、

「今回の訪日スケジュールの中に日本の半導体工場の訪問が予定されている。そして、その工場には我々のスタッフが何年も前から草として潜伏している。・・・破壊工作担当では無く、最先端集積回路のハイテク情報を盗み出すために潜入させた男だから、日本国内で過激な活動をこれまでしていない。日本の間抜けな公安が彼の存在に気が付いている筈は無い。」

公安も彼の周囲の人間でも誰も彼に不信感を抱いている人間は居ないと自信を込めて話した。

「そこで、今回は彼に大統領暗殺を任せる事にした。」

ここまで話すと、シュワルコフ大佐は彼の計画に異存がある人間が居ないか確かめる様に周囲をグルリと眺め回した。

「ただ、破壊工作担当では無いので、彼の身边には武器になる物は何も無い。それで、必

要な武器があれば何でも手渡す事や増援が必要なら人を送る事も伝えたが、彼の方から断ってきた・・彼からは、単なる簡単なサポートを要求して来ただけだった。元々優秀な工員だ。彼には何か考えがあるようだ。・・・」

ASS 日本工場

アドバンスド・セミコンダクター・システムズ (A S S) 日本工場は首都圏の郊外にある。首都圏と言っても工場の周囲は関東平野の外殻の山裾につながり、四季を通して景色は美しい。

蒸し暑かった夏も終わり、吹く風もすっかり秋めいて来た。

「もう二ヶ月もしない内に周囲の山々も美しく紅葉することだろう。気候は穏やかで景色は美しい。そして何より食べるものが美味しくなる。俺は秋が大好きだ。」

工場の渡り廊下を歩きながら、窓から見える景色を眺めて、安全課の横川課長は、のんびりとそんなことを考えていた。

「しかし工場長の突然の呼び出しとは一体全体何だろう？」と独り言が出た。

工場の製造現場に居たところを突然工場長から直ぐに工場長室に来るよにと呼び出しを受けたのだった。

現場から工場長室に向かう長い廊下を歩きながら考えたが、心当たりが見つからない横川であった。

工場長室の扉をノックすると、中から「入るように」と工場長の声が聞こえた。

「失礼しますと」と部屋の中に入ると、工場長に向かって30代半ば位の男が応接ソファに腰掛けているのに気付いた。

工場には、実に色々なお客が訪れる。取引先の技術者や半導体・電子装置関連の業界誌の記者やハイテク情報担当のテレビの取材者などこれまで色々な訪問客を見てきた横川であったが、この工場長に直面している男は、これまでのどの人とも雰囲気が違うと思った。

「高級そうな濃い紺のスーツに包まれているが、贅肉の無い筋肉質の均整のとれた体、油断の無い緊張感を伴った雰囲気、そして人を刺すような鋭い目つき・・強いて言うなれば・・」と、ここまで心の中で呟いた時、工場長が口を開いた。

「紹介しよう。こちらが、警視庁の三村さんだ」

「警視庁警備部の三村です、よろしく」

男がすっと立ち上がって横川に向かって挨拶した。

「警察の人間がなぜ？」と、一瞬あっけにとられて、答礼が遅れたのをカバーするように、工場長が「彼が当社の工場で安全管理を担当する課長の横川です」と三村に紹介した。

「安全課の横川です」少し落ち着きを取り戻して、胸ポケットから名刺入れを取り出し、三村に向かって名刺を差し出した。

心の中では、第一印象で感じた油断ならない雰囲気と鋭い目つきから何かの犯罪者めいたものを連想したのに、反対の立場の人と判って、名刺を交換しながら何だかバツの悪い物を感じていた。

「君を突然呼び出したのは、他でも無い・・・」

工場長が横川に向かって話し始めたが、何かを思い出したように、ちょっと間をおくと、「先ずここでの話は、当分の間、関係者だけの絶対の秘密として貰いたい。」と、言葉をつないだ。

工場長の何時になく真剣な顔と、警察関係者の立ち会いから、何か非常に重大な事が起きていると感じ、ここに来るまでのんびりしていた自分の心を引き締め直す横川であった。

「オロジアのグレゴリオ カミンスキー大統領が再来月、日本を訪問することになった。約1週間の日本滞在期間中に要人との会合を縫って、日本の各地を訪問する予定だが、その訪問予定地の中に当工場が選ばれた・・・外国の首脳をお迎えできることは、当社にとっても大変名誉なことだ。」と、工場長がゆっくりと一つ一つ言葉を選ぶように喋った。

オロジアのカミンスキー大統領のことは新聞やテレビでおぼろげながら聞いたことがある。長い間続いたオロジアの絶対主義体制を改変し、自由解放政策を打ち出した人であるとのことだ。しかし、そのため経済が混乱し、失業者も溢れ、政策に反対する守旧勢力の抵抗に遭い、何度も命を狙われるようなテロに遭遇している話など・・・そんな人物を工場に迎えて大丈夫なのかと思わず不安を感じる横川であった。

「そんな重要な人物を何もこんな辺鄙な工場にお迎えしなくても・・・」と、横川としては、そんな厄介な予定は変更して貰えないかと言おうとしたが、工場長が横川の言葉を塞ぐように、

「長い間、全体主義体制を布いていたオロジアは、軍需産業は突出した物を持っているが、民生分野では資本主義諸国から大きく立ち後れている。特に民生用半導体製造を初めとする、電子産業の立ち後れが非常に大きいとカミンスキー大統領は痛感されておられるよう

だ。そこで、その立ち遅れから回復するため、近々の内にオロジア国内に半導体製造工場を建設する予定となっている。その工場の立ち上げと生産指導には、アドバンスド・セミコンダクター・システムズグループの中から日本工場が当たることになった。従って、今回の日本訪問のスケジュールの中でも、当工場の訪問を最重要テーマとして上げられている。」

オロジアに最新の半導体製造工場を建設することと、その半導体製造工場の立ち上げに日本から応援を出すという話は横川にとって初耳だった。

「現在、日本の半導体業界が不況で、逆に ASS グループの他国の工場が忙しいから、暇な日本から工場立ち上げの応援を出すのですか？」

突然のニュースに驚いて、思わず口から出てしまった。

「日本の半導体製造技術が世界一優秀である事が認められているから、日本工場から人を出すことに決まったのだ！」

不謹慎な事を言うなど工場長から睨み付けられた。

「内の工場でオロジア語を話せる技術者なんて一人も居ませんよ・・・」

と、オロオロする横川に、

「技術というのは世界共通言語みたいなものだ。しっかりとした技術さえ身に付いていれば、世界中何処でも活躍出来る！細かい会話については通訳が付くから心配するな！」

と、横川の質問にウンザリする様に言った。

「カミンスキー大統領は、若い頃電気機器の工場で工員として働いた経験もあり、今回の訪問では、是非クリーンルームの中に入って、製造の様子を直接見てみたいと仰っておられるようだ。」

「ええー！クリーンルームの中にですか？一般の見学通路からではダメなのですか？」

横川が驚いて大きな声を出した。

半導体製造現場は極度の清浄度を必要とする。僅かな塵や埃が発生して、製造途中の仕掛かり品に付着しても、その製品をダメにしてしまいかねない。

そのためクリーンルームと呼ばれる極度の清浄空間を作り出して、その中で製造する訳であるが、人がクリーンルームの中で動けば、人体から塵や埃が発生する恐れがあり、クリーンルームの中の人間の数は必要最少限に止めたい。

そこで見学者のためにクリーンルームの一部に窓を設けて、そこから中に入らなくても製

造ラインの様子（ほんの一部ではあるが・・・）が見えるように見学者通路を設けてあるのだが、今回は大統領が直接クリーンルームの中に入りたいと言っているのだ。

しかし、一国の大統領が入るとなれば、大統領一人という訳にもいかず当然随行員もゾロゾロと入ることになるだろうからクリーンルームの清浄度が維持でき無くなり、製品の歩留まりも確保でき無くなると心配したのだった。

「第一あんな所は素人が見てもちっとも面白い所じゃないですし、全身にクリーンスーツを纏って貰わなければ、なりませんし・・・」

横川が必死に反対しようとするのを、「これは決定事項だ！」と工場長が苦虫を噛みつぶしたような表情で制した。

工場長としても最新の半導体製造ラインに大勢の人間を入れることによる悪影響は全て承知の上での上部からの命令であることが推察された。

「君も知っているかと思うが、カミンスキー大統領には政敵も多く、大統領を狙ったテロも頻発しているとのことだ・・・」

真剣な眼差しで横川の目を覗き込みながら工場長が言葉をついだ。

「このカミンスキー大統領の当社工場の訪問は是非とも成功させなければならない。・・・そこで警視庁の三村さんに協力して、今回の訪問に万一の事故も発生しないように、対策案を立ててもらいたい。これは命令だ！」

横川を鋭い目で見つめながら、毅然として言った。

三村が警備計画を立てるために工場内を視察して回りたいと希望したので、横川が案内することになり工場長室を後にした。

工場長室の在る事務棟から表に出て広い工場敷地内を三村を案内して回った。

工場は山裾の森林を切り開き、台地を削り、谷を埋めて造成したため、敷地内でも若干の高低差が残り、工場敷地の正面は開けた下り坂になっており、背面は山裾がせり出しているような配置となっていた。

約30万平方メートルを占める敷地には事務所や食堂の在る事務棟と半導体製造ラインを収める工場棟が3棟建ち、それらは渡り廊下で相互に行き来出来る様に配置されていた。

第一から第三までの工場棟の大きさはそれぞれ多少の差は在るとは謂え、巨大な建屋であり高さは6階建てのビルに匹敵し、一番大きな第一工場は間口が70メートル近く奥行きが200メートル以上ある。

巨大な石油タンカーを台地の上に並べたような配置ではあるが、敷地内にもなるべく自然の樹林をそのまま残したり、多くの植栽を配置し緑化に努め、周囲にもまだ多くの自然林が残る、自然と調和した配置となっていた。

数日前に嵐が関東地方を通過したばかりで、空気中の汚れを全て吹き飛ばしたかのように空は青く澄み渡っていた。

横川に敷地内を案内されながら、三村は懐から手帳を取り出して、頻りにメモを取っていた。

恐らく、周囲の樹木の影からテロリストが狙撃のため待ち伏せしたりする可能性を考えて、実際の地形や建物の配置を見ながら警備上のポイントを記入しているのだろう。

周囲は古くからの自然林で被われており、その背の高い樹木が工場建屋の間近まで迫っているのでテロリストが隠れるには都合の良い配置となっているため、必要とされる警備の人数を想定するのだった。

「当日は、カミンスキー大統領は東京のオロジア大使館の構内から特別に用意したヘリコプターに乗り込み、空路此处まで飛んで来て、社員用駐車場に着陸する予定です。」

メモを覗き込むように三村の方を見つめる横川の視線に気付いたのか、三村が口を開いた。

「ヘリコプターは随行員と警備員の分を含めて3機で飛来する予定です。反大統領派のテロリストが小型の地对空ミサイルで攻撃を仕掛ける可能性がありますが、同時に3機への攻撃は困難でしょうから、どの機を狙えば良いか判らなくする意味もあります。また離陸後は極力高度を取り、飛行ルートも狙撃の可能性の低いルートを取りますので、飛行中の防御に問題は無いと思います。」と、三村が話を続けた。

その大仰な計画に、そこまで警戒するのかと驚嘆する横川であった。

「社員駐車場から工場敷地まで約3百メートル程の距離がありますが、駐車場に着陸すると、オロジア国の用意した防弾ガラス張りの専用車をヘリコプターに横付けして、大統領を載せる予定です。従って狙撃のチャンスはヘリコプターから大統領専用車に乗り込む時と専用車から降りて工場建屋内に入る時しか無いでしょう。もちろん工場と駐車場の間の道路の両側と狙撃の可能性のある場所には全て警備員を配置します。」

社員用駐車場は工場から少し離れた台地に造成されているが、駐車場と工場敷地を結ぶ緩やかな坂道を往復しながら、三村が当日の警備の予定を横川に説明した。

三村の説明する警備の物々しさに、ここまで大げさな事を想定しているのかと驚くと共に、

いかなテロリストと云えどもこの警備の物量体制の前には、今回の訪問において大統領の命を狙うことは不可能だろうと横川には思えた。

三村は駐車場の中央に立って、今は従業員の通勤用車両で六割方埋まっている駐車場の全体を見回していた。

当日これらの車を全て排除すれば、十分3機のヘリコプターが離発着出来るだけの広さがあり、その上、駐車場の周囲に離発着の障害になるような物が無く、当初の計画通り理想的な位置関係を持つことを確認して、少し安心したような顔をした。

それよりも横川にして見れば、当日に自家用車通勤の人—こんな公共交通機関の無い郊外では従業員は、ほとんどは車通勤であるが—は、駐車場を使えなくなるため、当日の朝は電車で最寄り駅まで来て、そこから送迎バスに乗り換えて会社まで来ることになるであろう不便さ頭の中に思い描いた。

そんな面倒な事はさっさと終わらして、早く平常活動に戻りたいものだ！と思った。

警備の方は専門家に任せておけば大丈夫だろう・・・皆は大げさに騒いでいるが、これだけ嚴重な警戒を敷けば何も起こらないだろう・・・と、言うような平和ボケした考えが、如何に甘いものであったかは、後に思い知らされることになるのであるが、今の横川にはそのような危機感は微塵も感じることは無かった。

K Y K

工場外周の視察を終えて、再び工場建屋内に戻って来た。

「後で、クリーンルームにご案内しますが、その前に内のメンバーを紹介します。」

工場内の薄暗い廊下を歩きながら三村に告げた。

廊下に沿って幾つかの大小の会議室が並んでいたが、その内の一つの会議室の扉を開くと、そこには既に40名程の工員服姿の人たちが集まっていた。

扉を支えたまま、三村に入室を促した。

会議室内に集まっていた制服姿の男たちは、横川課長と共に入室して来た背広姿の男に視線を注いだ。

「突然招集をかけてすまなかったが、突然諸君らを呼び出したのは外でも無い・・・」

横川がコの字配置された会議室の中央の机に陣取り、興味深気に視線を送る男たちに向か

って口を開いた。

「まず、今回の招集の説明に入る前に、諸君らには守秘契約書にサインしてもらおう・・・」横川が目配せすると、係りの女性が守秘義務契約を印刷した紙片を男たちに配って歩いた。配られた守秘契約書をじっと眺めながら、突然の物々しい事態に集まった男たちの間に緊張感が走った。

守秘契約書が全て署名され回収されたことを確認して、横川が再び全員を前に話始めた。

「まず、ご紹介しよう。こちらは警視庁の三村さんだ。」と、隣に並んで立つ三村を紹介した。

「警視庁 警備部の三村です、よろしく」

と、興味深気に見つめる男たちの視線に臆することなく三村が軽く会釈した。

警察の人間と分かって、室内がざわついた。

「ここに集めたのは、当工場の非常時対応部隊（ERT）のメンバーです。非常時対応部隊ーエマージェンシー・レスポンス・チームーは安全課の課員と各製造現場の担当者からのボランティアの約40名で構成されています。半導体製造工場では色々危険な物を扱うため、自衛消防組織と併設して自主的にこのような組織を持っています。」と、三村にここに集まった人たちの説明をした。

「さっき守秘義務契約書にサインしてもらったように、これから話すことは許可が有るまで絶対に秘密だ。同僚や家族にも話してはならない！良いな！」と、横川が全員を見回しながら命令した。

男たちは、ただならぬ様子に唾を飲み込んで、じっと二人の方を見つめながら黙ってうなずいた。

「再来月の11月11日にオロジアのグレゴリー・カミンスキー大統領が当工場を訪問される・・・」と横川が話し始めた時、オロジアのカミンスキー大統領のことはテレビニュースや新聞で度々見て知っている居並ぶ男達から驚いたような声が上がった。

「諸君も知っての通り、全体主義国家だったオロジアが近年政変により、自由主義体制を敷くようになったが、未だに政情は安定せず、カミンスキー大統領を狙ったテロが頻発している。

今回のカミンスキー大統領の当工場訪問に当たって、万一の事があってはならない。工場外周の警備は警察の人がやって下さるが、工場内部は勝手に知った我々ERTが中心とならなければならない。従って当日はERTメンバーは全員出社してもらいたい」

「済みません、内の部署の澤ですがその日は有給休暇の申請が以前から出ていますが・・・」
横川の命令に抗する上役の言葉に、澤が申し訳なさそうに頭を下げた。

「済みません、その日は国の親友の結婚式になっていて、どうしても祝ってあげたくて・・・」
「分かった、一人くらい居なくてもどうって事は無いだろう・・・澤、親友を祝ってやれ。」
有り難う御座います・・・と大事な日に一人休暇を取得する事になり、申し訳なさそうに周囲を見回して頭を下げた。

ERT チーム全員が集まって始められた会議の冒頭、

「そんな VIP にわざわざこんな辺鄙な工場に来ていただかなくても・・・」
と、一人の隊員から困惑した声があがった。

「これは、まだ秘密だがオロジアに建設する半導体工場の立ち上げに我 ASS 日本工場から人員を派遣する事が決まっている。もしかするとこの中から何人かはオロジアに派遣される事になるかも知れない。従って、大統領も今回の日本訪問で当工場の訪問を最重要テーマにされている。」と、横川が諭すようにその男の方に向かって話した。

「日本の半導体の景気が悪くて、日本工場が暇そうだから日本から人を出すことになったのですか？」と別の男が質問して来た。

「バカ者！日本の半導体製造技術が世界一だということを認められているから、日本から人を派遣することになったんだ！」

自分が工場長に対して思わず質問してしまったような質問をされて、照れ隠しのような大きな声を上げた。

半導体業界にはシリコンサイクルと呼ばれる4年周期の好景気と不景気の循環があった。

4年毎に開催されるオリンピックと関係する一オリンピックの為に最新の電子機器の需要が高まる一と云う説もあるが確証は無い。

好景気の際は半導体製品の製造に追われて息継ぎする暇も無い程、多忙を極める。

一方不況時には何もする事が無いほど暇になる。

中にはこの不況時は次の好況時の準備になるので丁度良い一好況時は忙し過ぎて生産設備の増設や新設などしている暇は無い一と言う人もいる。厳しい冬を乗り越えれば、必ず春が訪れる事を知っているからである。

しかし、現在日本の半導体業界を襲っている不況はシリコンサイクルとは関係が無い。

それは、数年前にアメリカから持ち出された日米半導体摩擦に起因している。

日本が高性能で低価格な半導体製品を大量に製造する技術を身に着け、半導体産業発祥の地である米国を凌ぐようになり、米国が日本に対して危機感を抱くようになったのであった。

一時は世界の半導体供給の約50%近くを日本製半導体が占め、ベスト10の内8社が誰でも聞いた事のあるような日本の大手電機会社が占め、ベスト11から20位までも、一般の人が余り知らないような日本企業が多数を占めていた。‘半導体は産業の米’と呼ばれていた良い時代であった。

これに対して自国の半導体産業を守りたい米国は露骨な圧力を掛けてきた。

それは、佐藤栄作首相とニクソン大統領の時代に勃発した日米繊維摩擦に似ていた。

この時、米国の繊維産業の衰退を安価な日本製繊維製品が原因として、敵対通商法をちらつかせ日本に規制を迫って来たのであった。

結局、米国の圧力の前に屈した日本は、田中角栄通産大臣による紡績機械を破壊すれば補助金を出すと云う繊維会社に対する自殺命令で決着する事となった。

ただこの様な悲惨な事態の結果米国の繊維産業が復活すれば、日本としても、まだやった甲斐は在ったかも知れないが、米国の繊維産業は二度と復活する事は無く、繊維産業の中心は日本を離れて東南アジア諸国に移っただけであった。

結局衰退した米国の繊維業界が日本を死出の道連れにしかただけの結果しか無かった。

今回の日米半導体摩擦は米国から突き付けられた新たな悲劇であり、その中で狂躁する日本の半導体会社の行動は悲劇を乗り越えて喜劇のような体を示していた。

米国製半導体製品の輸入量を増加させるため、自社のショールームに商売敵であるはずの外国製半導体を並べ販売促進活動をしたり、日本製半導体の世界シェアを下げるため台湾や韓国の企業に技術移転をしたりした。

こうして、韓国や台湾の企業が力を付け始めるに従い、日本の半導体産業は衰退に向かって行った。

当初は、ASSは米国に本社を持つ外国製半導体とされ、直接の影響は受けなかったが、日本製半導体の衰退に伴う日本の電子産業の衰退はジワジワとボディーブローのようにASS日本工場の体力を奪いつつあり、他国のASSの工場に比べて暇で在る事は確かであった。

前回の日米繊維摩擦での日本の譲歩は沖縄返還交渉を控えており政府としても仕方無い一

面が在ったと云う弁護の余地があるが、今回の日米半導体摩擦では通産省(現在の経済産業省)のお役人が米国のお先棒を担いただけとしか横川には思えなかった。

現在、何々ボウとか、かつては紡績会社であった名残を会社名に留める会社は多いが、これら〇〇ボウの中で実際に紡績を行っている会社は日本には無い。

これと同じように21世紀の初め頃には日本の半導体製造会社は無くなって仕舞うのでは無いかと考える横川であった。

「でも、この工場でおロシア語なんか話せる人は居ませんよ？」と、不安そうな声が耳に飛び込み思考が戻された。

「心配しなくても向こうに行けば通訳が付くだろう。しかし話が出来る能力よりもっと重要な事は技術力だ！技術と言うのは世界共通語なんだ！日本で通用する技術はアメリカに行ってもおロシアに行っても通用する。だから、しっかりとした技術力さえ身に付けていれば、片言しか話せなくても世界中どこに行っても仕事は出来るんだ。若い内は世界中アチコチを見て来た方が良い・・・」

自分がそんな政情不安定な国に派遣されたら嫌だなと思いつつも詰めかけた男たちに話した。

「さて、質問はそれぐらいにして、今日諸君に集まってもらったのは KYK をやって貰うためだ。KYK と言っても普段行う KYK とは違うぞ。当工場内で大統領の暗殺を目論むテロリストから大統領を護衛するための KYK だ！万一厳重な警戒の目を潜り抜けて暗殺者が工場内に忍び込んだ場合、工場内の危険物を使って暗殺を実行する可能性が在るかを見当する。」

「ケーワイケー？」

横川が KYK という言葉を連発するのを聞いて何の意味か、訝しがるように三村が呟いた。

「KYK というのは英語でも何でも無く、危険・予知・活動のローマ字の頭を集めただけですよ。」

と、三村の独り言を耳にした横川が三村の方を振り返って説明した。

「半導体製造ラインの中では色々な特ガスを使いますが、フォスフィンやジボラン等は非常に毒性が強い。テロリストが使う危険性はどうでしょうか？」一人の男が発言した。

「フォスフィン？ジボラン？」初めて聞く言葉に三村が理解出来ないと言うように首を振った。

「半導体の製造においては、化学反応を利用して製造するため、種々の化学的活性の強い物質を使います。そして、この化学的活性の強い物質は、大抵人間に取っては毒物になります。フォスフィンにはリンに水素が結合した構造を持つ気体分子であり、ジボランはホウ素が水素と結合して出来た気体です。リンもホウ素も水素と結合する事により、大変反応性が高くなり人体にとっては非常に有害な毒ガスとなります。」

横川が三村の方を面倒そうに振り向いて説明した。

「確かにフォスフィンやジボランは強力な毒ガスだが、それでも短時間で確実な殺害を狙って使用するには、工場視察中の大統領の周囲を高い濃度にする必要がある。現在工場で使用の特ガスは不活性ガスで希釈した物を使用しているから、クリーンルーム内を視察中の大統領を狙って特ガスを放出しても高濃度に達するまでに時間がかかるのでは無いだろうか？それに特ガスはみな特有の強い臭気を持っているから大統領の護衛にも気付かれ易い。」

横川と非常時対応部隊のメンバーが可能性についてあれこれ議論を始めた。

「そんなに強い臭いがするのですか？」三村が質問した。

「ええ、フォスフィンと言うと何かハイカラな物のように聞こえますが、中高年の人には割とポピュラーな物なんですよ・・・昔お祭りの夜店ではアセチレンランプを使って明かりにしていました。このアセチレンランプではカーバイドという粉を水に溶かしてアセチレンガスを発生させるのですが、大変な悪臭を発生する。多くの人はアセチレンというものは大変臭い物だと思っていますが、実際純粋なアセチレンはほとんど臭いがしないか、鼻の良い人には爽やかな香りがするものなのです。実際の悪臭の原因はアセチレンと共に発生するフォスフィンにあったのです。」

面白そうに説明する横川の話が長くなりそうであったが、三村は興味深気に耳を傾けた。

「カーバイドは石灰石とコークスを電気炉で加熱して製造しますが、石灰石は太古の生物の死骸を多く含んでいるのでリン分を沢山含んでいます。このリン分と石灰石中のカルシウム分が加熱により反応してリン化石灰と言う化学物質が副成されカーバイド中に残留することになります。リン化石灰は水と容易に反応してフォスフィンを作ります。フォスフィンには

水とは反応しませんが、空気とは反応して、高濃度の場合は自然発火します。従ってこの燐化石灰は自然発火の危険性から消防法では第三類の危険物—すなわち禁水性物質に指定されています。・・・ところで、フォスフィンの臭いですが、魚が腐ったような臭いと呼ばれていますが、実際、澱んだドブ川の臭いを数百倍濃縮したような臭いがします。・・・まあもっとも、最近は汚いドブ川その物が少なくなって来ましたが。・・・恐らく水中で死んだ魚や動物が泥の中で嫌気性の微生物により分解される際に骨の中の燐分が分解されフォスフィンが発生しているのでしょう。」

ここで横川がニヤッと笑って三村を見ながら話を続けた。

「私はヒトダマの正体はこのフォスフィンガスではないかと思っています。ヒトダマが出現する前は、生臭い風が吹くと言われていますが、沼の底の泥の中に溜まっていた高濃度のフォスフィンガスが何かの拍子に水中に放出され、水面から空中に浮かび上がる際に、空気に触れて自然発火して火の玉に成るのでは無いかと思います。」

ここまで、三村に説明すると、隊員に向かい結論を出すように、

「以上、フォスフィンは大変毒性の強いガスですが、その臭いで危険性を予期できるし、昔の縁日の夜店でアセチレンランプを毎日のように使っていた屋台の人にフォスフィン中毒の人が出たとの話はありませんから、低濃度では効果が無く、大統領暗殺のための武器としては、実用性は低いと思います。」と、締めて、次の危険性について議論するよう促した。

「半導体製造装置は大変重く2トン以上の重量を持つ物もあります。又、重心が高く不安定な物も在りますから、テロリストが大統領一行に向かって押し倒すという可能性はどうでしょうか？」別の男が手を挙げて質問した。

「確かに半導体製造装置の下敷きになれば命が危ないです。事実装置搬入中に装置に挟まれ作業員が死亡した—との事例は何件か在ります。しかし据付が終了した後の装置は電源ケーブルや配管などの用力により工場設備と結び付けられるため、これらの用力を切断しない事には押し倒す事は困難でしょう。数年前に半導体工場を大地震が襲った事がありますが、装置が数メートルずれた事は在りますが、装置が転倒した例は無いようです。」

「エピタキシャル成長装置を爆破させる可能性はどうでしょう？」別の工員が挙手した。

「エピタキシャル成長装置？」

三村が耳慣れない言葉に独り言を發した。

「エピタキシャル成長装置とは、シリコンの結晶を成長させる装置で、1200度近い高温で大量の水素を使用します。従って少しでも空気に触れれば爆発する危険性があります。」と、横目で三村を見ながら説明した。

「エピタキシャル成長装置は危険性が在りますので、今回装置は停止したままにしておきましょう。それと、今回の視察ルートには含めないようしましょう。」

その後も侃々諤々クリーンルーム内での暗殺の危険性について議論したが、結論としてクリーンルーム内には危険な物は多く在るが、直接暗殺に仕える物は無く、結局銃器による狙撃以外に暗殺の手段は無いと確認された。

そして、当日は入場時に持ち物検査を厳重に行って不審な物の持ち込みを防ぐ事。現場に不審な物が無いか確認する事と決定された。

ーしかし、この時の議論が如何に甘いものであったか、後ほど思い知らされるのであった。

解散して ERT 部員が立ち去った会議室には、三村と横川だけが残っていた。

「今の打合せですが、やはりクリーンルーム内に関しては、警察では知識の無い事が多すぎるように思います。工場外周の警備に関しては警察で万全を持って行いますが、クリーンルーム内では ERT の皆さんの協力を仰がねばならないと感じています・・・」

先程の打合せを何の予備知識も無いまま聞いて、自分の無知さに軽いショックを受けたように溜息まじりに告げた。

「勿論我々も全力を挙げて警察に協力します。」

会議の専門的議論に困惑したような三村を勇気付ける様にはっきりと口にすると、

「これから実際にクリーンルームをご案内しましょう。」

と、三村を誘って会議室を後にした。

「工場建屋内は土足厳禁ですので此所で靴を脱いで下さい。」

横川の指示に従って工場に繋がる廊下に設けられた靴脱ぎ所で履いて来た革靴を脱ぎ、工場備え付けのスリッパに履き替えさせられた。

クリーンルームに繋がる長い廊下の床はリノリューム張りで、埃一つ墜ちておらず、艶やかな表面を晒していた。そして両側の壁や天井にも染み一つ無く清掃が行き届いている事

に感心した。

山裾のなだらかな起伏に沿って立てられた建物内を幾つかの階段を登り、角を曲がり、建屋同士を連絡する渡り廊下を渡ってさらに幾つかの廊下を通りクリーンルームの入り口に到着した。

入り口扉の上には第一拡散室と字彫りされたプラスチックプレートが懸かっていた。

「先ずクリーンルームに入って頂くために、この奥の更衣室でクリーンスーツに着替えて頂きます。」

横川が首からストラップで提げていた顔写真入りの社員証を扉の横の壁に設置したカードリーダーに押し当てると、扉が自動的に開いた。

横川は工場入場時に三村に手渡した来客者用のバッジをカードリーダーに押し当てるよう促した。

カードリーダーの読み取り情報により誰がクリーンルームに入ったか記録出来る様になっているのかと歓心する三村であった。

中は広い部屋となっており、上下繋ぎとなった何色かのクリーンスーツがハンガーに掛けられていた。

横川はその中から緑色のクリーンスーツを手にとると三村に差し出した。

「クリーンルーム内は金属物の持ち込みは禁止されていますので、腕時計は外して下さい。貴重品は其処のロッカーに入れて下さい。」と、壁に並んだコインロッカーの様なロッカーを示した。

三村が自分の胸の上を押さえながら困った表情を浮かべた。

上着を脱いだその下には拳銃が胸の位置のホルスターに入れられていた。

普段目にする事のない本物の銃器の威圧感にギクリとして、

「まあ・・・今回は特別に良いでしょう・・・」

と、拳銃の持ち込みを許可するのであった。

「まず手を洗って下さい。」

三村を壁に何台も設置されている自動手洗器に誘った。

洗面所の流し台の様な形状をした器具に横川が手を差し入れた。見よう見まねで三村も従った。

流し台の上に突き出した庇の様な所から温水が噴き出し、差し入れた手に注ぎ懸かった。

それに続いて手洗い用の液状石鹸が手に掛かった。

テレビ等で手術室に入る前に医者が良く手洗いしている光景を見る事があるが、それと同じようにクリーンルームに入るためには汚染の管理をしているのだなーと感心しながら手を良く洗った。

手洗器の中で良く手揉みしていると、再び濯ぎのお湯が噴き出し、最後に温風が吹き出して濡れた手を乾燥させた。

「良くできてますね・・・家にも一台欲しいな・・・」三村が感心したように呟いた。

「三村さんは煙草を吸いますか？」

「いいえ、私は吸いませんが・・・」

「クリーンルームに入る前はうがいをしなければなりません。」

と、水飲み器の様な装置を示した。

「特に煙草を吸う人は喉の奥から出る有害物を除去するためにうがいをする事になっています。・・・もっともウチの従業員でもさぼってしない人は多いですけどね・・・」

クリーンルームの入るにはそれほどまでの準備をしなければいけないのかと驚いた様な表情を浮かべた。

ズボンとワイシャツ姿の三村に上下繋ぎとなったクリーンスーツの着用を手助けしながら横川が面白い事を言った。

「ところで三村さんはバニースーツって知ってますか？」

横川が笑い顔を浮かべて問い掛けた。

「ええ・・・ちょっと高いクラブで女の子が着ている兔みたいなスーツですよ・・・」

「アメリカ人はこのクリーンスーツの事をバニースーツと言うんですよ。アメリカから技術者が出張してくるとバニースーツ、バニースーツと呼んでいます。・・・白くてブカブカしてて‘うさちゃん’の着ぐるみの様だからとの事です。」

「確かにゆるキャラの着ぐるみの様ですね・・・」

フードを被らせマスクを被らせスパッツと一体化したクリーンシューズを履かせ手袋を着用させ全ての準備が調った。

この様に全身をブカブカのクリーンスーツで被い、顔もフードとマスクで隠してしまえば、万一テロリストが紛れ込んだ場合見分けが付かなくなるなーと、当日の警備に心を馳せる三村であった。

そんな三村の杞憂を他所に横川が手招きした。

正面に大きな硝子窓を持つ扉があった。

その扉の手前で思わず脚を取られそうになった。

まるでゴキブリホイホイの粘着シートの様だなーと、靴裏に床に敷かれたシートの粘着性を感じながら思った。

「粘着マットで靴裏の汚れを取り除きます・・・」

と、横川の方を振り返った三村に説明した。

「それではエアシャワーでクリーンスーツ表面に付着した埃を吹き飛ばします。」

横川が大きなガラスを嵌め込んだステンレス扉を開けて、横幅が1.2メートルくらい奥行きが3メートルくらいの全体がステンレスで作られた小部屋に三村を入れた。前方には同じようなガラス窓を持つステンレス扉が閉じていた。両方の壁には角度が変えられる様な仕組みを持つ空気噴き出し口が幾つも備わっていた。

三村に続いて横川が小部屋の中に入り後ろ手に扉を閉めると、同時に壁面の空気吹き出し口から強い風が吹き出し始めた。

幾つも設けられた吹き出し口は脚や胴や頭部に風が当たるよう角度が調節されている事が判った。

横川が吹き付ける風の中で片脚ずつ上げてクリーンシューズのスパッツの上からパンパンと脚を叩いたり、胴を叩いたりしていた。

三村も見よう見まねでクリーンスーツに被われた身体を叩いた。

一定時間が過ぎると風が止み、正面の扉が自動的に開いた。

其処はまるで大型の体育館の様な広さであり多数の装置が設置され並べられた装置の間の通路には無人搬送車が回転灯を煌めかせながら動いていた。

エアシャワーの出口にも粘着シートが在ったが今度は脚を取られる事は無かった。

始めて見る半導体の製造ラインに辺りをキョロキョロと目を配る三村に

「此所がクリーンルームです。約30センチ立法の空気の中に0.1ミクロン以上の大きさのゴミが1個以下に調整されています。ウルパフィルターと呼ばれる目の細かいフィルターで漉し取られて清浄化された空気は部屋の天井から噴き出し、床下から吸い取られ、塵の含まれない空気の循環を作っています。」

横川の説明に天井を見上げると一面プラスチック製の格子に被われており、部屋の照明はその格子の中に設けられていた。

天井一面を被うスリットから清浄化された空気が噴き出している事が理解出来た。

空気を送り出す送風機の音であろうかー 部屋全体にゴウゴウと低周波の音が響いているのが感じられた。

足下を見るとまるで道路の側溝の上に掛けられた鉄製のグレーチングの様な格子が一面に敷き詰められ、下に大きな空間が出来ているのが判った。地下部分の深さはおよそ6メートルくらい在るように見えた。

テロリストがこの地下部分に隠れていたら上を通過する大統領の一行を監視するのは容易であり、足下から攻撃する事は可能であると思った。

「この地下部分は装置で使用する電力や水などを供給する機械室となっております。」

じっと下を見詰める三村の様子を見て声を掛けた。

「どうですか？始めてクリーンルームに入られた感想は？」

「空調が良く効いていて暑くは無いですが、全身をクリーンスーツに覆われて少しジメッとした感じがしますね・・・」

「そのジメジメした感じはスーツに覆われているだけでは無いかも知れませんね。クリーンルーム内の空気は加湿しているんですよ。」

「エッ！わざわざ加湿するんですか？機械に取って湿度が低い方が良いのかと思ってました。」

「湿度が高いと結露の問題が有り低くしたいのは山々なんですが、湿度の低い乾燥した空気の中では静電気が発生する恐れがあります。静電気は製造中の半導体デバイスを破壊する恐れが在るので、わざと加湿する訳です。当工場では湿度50～60%に収まるよう55%で制御しています。」

「そうですか・・・」

装置が両側に並ぶ通路に沿って歩きながら横川が各々の装置の説明をしていたが、予備知識の無い三村には残念ながらほとんど理解する事は出来なかった。

通路の両側に並べられた装置は大型の物置やプレハブ小屋程の大きさがあった。

ほとんどの装置の前に人はいなかったが、それでも幾つかの装置の前ではクリーンスーツ姿の作業者が操作している姿が見られた。

これらの作業者の中にテロリストが混じったらー と恐れた。

「世の中には名人とか人間国宝と云われる人がいて大体3ミクロンー1千分の3ミリです

ねー精度の加工が出来る人がいるようです。もしかして、この様な人達が作れば線幅3ミクロン位の集積回路は出来るかも知れませんね。でも、もし手作業でICを作っていたら一つのICが出来るまでに何ヶ月も掛かって、値段も1個何十万円もする事になるでしょう。工芸品とはなっても、とても工業品とはなりませんね。更に現在では配線の最小線幅は0.3ミクロンを下回ろうとしています。従って半導体製品は人間の手では作れないのです。専用の製造装置がどうしても必要となります。一つのICが出来るまでに300~400以上の工程が必要となりますが、各工程事に専用の装置が必要となる訳です。」

三村の杞憂に気付かず横川は種々の装置が製造ラインに並ぶ理由を説明し続けた。

「ところで、半導体って良く聞きますが半導体って何ですか？」

製造ラインを並んで歩きながら三村が質問した。

突然の三村の質問に、ああーそう来たか！と言うような顔をマスクの下で浮かべた横川は、いきなりバンド理論の話をして専門的すぎるし・・・ずぶの素人に解る様に何処から説明した物か・・・と、ちょっと考えてから、

「半導体と言う言葉で物性を表す場合と、その物性を利用した電子装置を表す場合の両方があるややこしいのですが、三村さんはICと言うゲジゲジ虫見たいな形をしたプラスチックの容器の両側から金属の脚がでている電子部品を見た事は在りますよね？」

「ええ・・・」

「あのプラスチックの箱の中には半導体素子が入っており、その半導体素子やー私たちはデバイスと呼びますがーICを作る産業を半導体産業と呼んでいます・・・さて物性としての半導体とは何かというと・・・世の中には電気を流し易い物質が在ります。これを導体と呼びます。銅やアルミの様な金属に代表されますね。これとは逆に電気を流し難い物質が在ります。これを絶縁体と呼びます。ゴムとかガラスとか空気などですね。所が世の中には在る条件では導体となって電気を流し、また別の条件では電気を流さない絶縁体となる物質があります。これが半導体です。」

「半分導体で半分絶縁体だから半導体ですか？」

「ハハ・・・実際にはウイelsonの半導体の定理というものがあって、その定理を満たす物を半導体と呼ぶ訳ですがーちょっと専門的になりすぎるので、そう考えても、あなたが間違えているとは言えないでしょう・・・

そして、この在る条件では導体となって電気を流し、また別の状態では絶縁体となって電

気を流さ無いと言う性質は大変重要で、これは電気回路のスイッチと同じ事です。この半導体素子を多数組み合わせる事により自動で動く多数のスイッチを組み合わせることになり複雑な論理計算や大量の計算を瞬時に行う事が出来るのです。」

「おや！此所は凄い照明の色ですね！」

続いて案内された一郭は全体が黄色い照明に照らされており、見る物全てが黄色く染まっていた。

「ここは、イエロールームといいます。回路を転写するための製造ラインです。半導体素子の回路の元となるマスクと呼ばれる原版から紫外線を使って、仕掛品の上に塗布されたフォトレジストと呼ばれる樹脂に焼き付けるのです。フォトレジストは光りの当たった部分は溶剤に溶けやすくなるため、マスクで遮られて光りの当たった部分と当たらなかった部分がまるで日光写真の様に残るのです。フォトレジストは光りと反応し易いため、フォトレジストの感度が低い黄色い光りを照明としているのです。」

エリア全体が黄色い照明で照らされている事に納得したように肯いた。

「ところで三村さんは黄色い照明よりピンクの照明で照らされた所の方が好きなんじゃないですか？」

「ハハハ・・・」

暗殺者の狙い

横川と三村が暢気な話をしている間にも、ASS に従業員として忍び込んだオロジアの潜入工作者は活動を開始していた。

「暗殺のために最も有効な武器は、今ここに在る物を武器として使う事だ・・・幸い此所には暗殺のための武器を作るのに必要な薬品が全て揃っている。ドラフトチャンバー内で安全に作業を進める事が出来る。ウォーターバスにマグネティックスターラーや真空ポンプ等の道具や、液体窒素もふんだんに得る事が出来る。出来た物を確認する FT-IR や Q-マス等の分析装置も在る。問題は人目に付かないよう作業を進める事だ・・・」

頭の中で考えながらドラフトチャンバー内に道具を準備し始めた。

ドラフトチャンバーとは、有害ガスを排気する機能を備えた危険性物を取り扱うための設

備である。内側はステンレス等の耐薬品性の部材で被われ、流し台の様な水回りを持ち、前面は透明ガラスの上下できるスライド扉を持つため、耐薬品用長手袋をはめた手だけを入れて発生する気体に振れず作業が出来る。

この製造ラインには横幅3メートル以上のドラフトチャンバーが4機用意されており、装置部品の洗浄や薬品の調合に使用されている。

背後から人の近づく気配を感じ、「おっと！誰か来た。」と頭の中で呟いて隠すのであった。

警視庁の三村が来てから数日経っていた。

まだ一般従業員にはカミンスキー大統領の訪問は伏せられていたが、非常時対応部隊員により、それとなく工場内に異物は無いかと、安全確認が行われていたが、まだ怪しまれている様には思われなかった。

その後も、三村は単独であるいは複数の指揮下の人間を引き連れて度々工場を訪問して、関係者と当日の警備に関して打合せを行った。

これを受けて、社内の安全確認もより熱意を帯びて実施される様になっていた。

カミンスキー大統領訪問まで1ヶ月半程となり、何時までも秘密にしておく事は好ましく無く、一般従業員にも訪問の予定が公表された。

カミンスキー大統領の訪問のニュースは驚きを持って迎えられたが、一般従業員にとっては自分達に関係ない事と、その意味も理解出来ず暢気に受け入れられただけであった。

「おい！オロジアのカミンスキー大統領ってのは何度も暗殺されそうになった事が在るらしいぞ！この工場でも事件が起きるんじゃないか？」と、真剣さの欠片も無い冗談めかした声が聞こえた。

そんな飛び交う冗談を耳にしながら暗殺者は、「まったく平和ボケした間抜けな連中だ」と、心の中で呟くのであった。

人目を盗みながらの作業であり、時間は掛かっていたが、中間物質の合成まで進んでいた。シュワルコフ大佐から送ってもらったIRスペクトルと比較してもかなりの純度の物が出来ている事が予想された。

大統領到着

とうとう大統領訪問の日がやって来た。

まだ夜も明けぬうちから警察犬を連れた警官が工場周囲の森林や工場敷地内を警戒して回り、工場の周囲には5メートルおきに警備の警官が立った。

特にヘリコプターの離発着場となった社員駐車場と工場を結ぶ道路には警察官による複数の人間のバリケードが出来ていた。

警察官の作る人垣の要所要所にはテレビや新聞など報道機関の人間が高い脚立を立てカメラの放列を敷いていた。

社員駐車場が利用出来ないため最寄り駅から臨時に増発された送迎バスで運ばれた従業員が門の前で大きな列を作っていた。

工場には3箇所の社員用の入り口があるが、それぞれに工場総務の人間が立ち、入場者の警戒に当たっていた。

大人数の従業員や報道関係者の来場への対応に、総務の人間だけでは足りず、警察官も受け入れを受け持っていた。

従業員は、それぞれ顔写真入りの社員証（社員バッジ）を持っているので一人一人写真と顔を比較され、バッグなどの持ち物は中を開いて調べられたり、空港に設置されているような門型の金属探知機により念入りに全身を探查された。

更に入構前には全員警察官により入念にボディチェックされ、女性従業員には婦人警官によりボディチェックがされた。

社員証の写真が古くて顔が違ふと疑われた従業員は、止められて慎重に調査された。

この厳重な警戒を通るだけで列の後ろに並んだ人間には30分近くを要した。

自分の職場に入るだけで何でこんなに手間が掛かるんだ！と不満の声があちこちで上がっていた。

工場への入門の為の長い列を見て、これだけ厳重な警戒ならよもやテロリストの入り込む余地は無いだらうと安心する横川であった。

漸くそれぞれの職場に着いた従業員は、通常業務を開始し始めたが、どこか普段と違う緊張感の様なものが漂っていた。

大統領の到着は午後1時半を予定していたので、何時もの様に昼休憩を取って、午後の業務に就いた頃には何処か堅苦しい雰囲気も取れ普段の職場に戻っている様に感じられた。

腕時計を気にして手元を見ていた三村がこちらに近づくヘリコプターのローター音を耳に

して上空を見上げた。

雲一つ無い晴れ上がった空に3機のヘリコプターが近づいて来る様子が小さく見られた。

「よし、時間通りだ。」

無事に到着した様子を確認してホッとしたように声を上げた。

「工場敷地の内外は当方で警備しますが、クリーンルーム内では全く勝手が分からないので、宜しくご協力を頼みます。」

と、傍らに佇む横川に小さく頭を下げた。

「こちらこそ、宜しくお願いします。」

厳重な警備体制に何も起きる事は無いだろうと安心しきった横川が笑顔で応えた。

「それでは、打合せの通り我々は集中監視室で待機しましょう。」

と、三村を誘って建物の中に入った。

工場内に設けられた集中監視室ではクリーンルームや機械室やその他の工場内と今回特別に奥外に設置されたカメラの映像を複数のモニターに映す事が出来、理想的な待機場所と思われた。

今回三村はそれらの映像を見ながら携帯無線機で各所の警察官に指示を出す事になっていた。振り返るとヘリコプターが無事に社員用駐車場に着陸する様子が見留められた。

集中監視室では既に非常時対応部隊の人間が待機しており、幾つもあるモニター画面を食い入る様に見詰めていた。

モニターにはヘリコプターから降りたカミンスキー大統領が厳つい専用車に乗り込む姿が映し出されていた。

三村と横川が集中監視室の中に入った時は既に大統領を乗せた車列がこちらに向かっている所であった。

通常のテレビ画面を映すモニターにもニュース番組の中の速報で警備の警察官が作る人垣の間を何台もの車が通りすぎる様子を映していた。

続いて工場の門をくぐった車が事務棟の来客玄関に横付けする様子が映し出された。

ニュースカメラは遠方からの画像となっているため、張り出した大きな庇と大型の車の影に隠れ大統領の姿を明確に捉える事は出来なかったが、工場長やASSの役員達が出迎え握手を交わす様子が判った。

やがて、最初の挨拶も終わり一行は社内に招き入れられ、大統領専用車も来客用玄関の車

寄せを離れると、後には警備の人間を残すだけであった。

現場リポーターの短いコメントを残して画面が通常のニュース番組に切り替わったのでテレビの電源を落とした。

大統領一行はこれから工場長による半導体工業や半導体製造ラインに関する短いブリーフィングを受けてからクリーンルームに入る事になっていた。

30分程手持ちぶさたな時間を集中監視室で過ごしていると、部屋の電話が鳴った。

電話を取った隊員が、「これからクリーンルームに向かうようです！」と、こちらを向いて声を上げた。

集中監視室内に緊張が走った。

やがて、クリーンルーム内の監視カメラが大統領一行がエアシャワーを抜けてクリーンルーム内に入り始めた様子を捉え出した。

大統領の前には何人かのオロジア人と思われる人間が先行して歩き、大統領の隣には工場長が並んで説明をし、その背後には通訳と思われる男が続いていた。

大統領の一团は総勢14、5名になるようだった。

「これだけの人間にゾロゾロ歩かれたら部屋の中の^{クリーンリネス}清浄度が心配だな・・・」

と、眉を蹙めてクリーンルームの中の塵埃量を自動計測するパーティクルモニターをじっと見詰めた。

大統領と並んで歩く工場長が両側に並ぶ製造装置を指差したり、時には身振りを交えて話掛ける様子がモニターに映し出されていた。

これを受けて大統領も如何にも驚いたという様な仕草を返していた。

監視設備は映像だけで音声は拾わないため、何を言っているのか判らなかったが、恐らく大統領に装置や製造プロセスの説明をしているものと思われた。

「・・・あの・・・」

三村と並んでモニターをジッと見詰める横川に後ろから宮下隊員がモジモジとしながら近づいて来た。

「・・・あの・・・」

「何だ？宮下。」

非常事態発生時には蛮勇を起こしてでも対応に駆け付けなければならないERTにおいて、

以前から、小心で消極的な態度が気になっていた男であった。

「・・・あの・・・ちょっと気になっていたんですけど・・・」

「何が？」進まない話にイラッとしながら聞き返した。

「いえ、・・・あの・・・ちょっと気になっていたんですが・・・特にポックルと IPA とフッ酸の払い出し量と在庫量が合わない事があったんです。・・・いえ、担当者が台帳に記載を忘れて在庫量が合わない事は良くある事ですし、現在は在庫量は正しくなっていますが・・・」

「なぜそれを早く言わなかった！」

工場内で使用する化学薬品は薬品庫から払い出す際に台帳に記入して管理する様になっている。しかし、実際には担当者が記載を忘れて在庫との整合性がとれなくなることは日常発生していた。宮下は業務上台帳を見れる立場にあったので、それに気付いたのであろう。

ポックル、IPA、フッ酸と謂う単語が頭の中をグルグル回った。

これらの化学薬品に付いては先の KYK でも議論に上がったことがあった。

ポックルは水と接触すると分解して塩酸を発生させ危険であるが、皮膚に付いた程度で直ちに問題を起こすとは考えられなかった。

IPA はアルコールの一種であり、メチルアルコールの様に猛毒であり飲むと危険であるが、皮膚に付着した程度では同じく問題は無いと考えられた。実際、装置クリーニングで布拭きする際に最も頻繁に利用する薬品である。

フッ酸ーフッ化水素酸はちょっと面倒である。塩酸や硫酸等他の酸と違って臭いも刺激もない。外観は水の様で在り、掛けられても水を掛けられた様な感じしかしないであろう。しかし、フッ酸はカルシウムと容易に反応する性質があり、直ぐに手当てしないと肉が腐り骨が溶け出す恐れがあった。そこで非常時には直ぐに純水で洗い流し沃化カルシウム軟膏を塗布するなどの緊急対応策を用意してあった。

個々の薬品については対応検討済みであったが、ポックル、IPA、フッ酸と謂う言葉が何故か頭から離れなかった。

個別では別に問題の無い薬品・・・しかし、これらを同時に使用したら・・・これらを化学反応させたら・・・頭の中で不吉な予感が蠢いた。

半導体製造の技術者は電気科卒業者が多く化学に詳しい者は少ない。

「おい！原田！ポックルと IPA とフッ酸で何が出来るか考えて見ろ！」

背後に控えていた原田という化学科出身の男の方を振り向いて大声を上げた。

「あの・・・これはあくまで推測ですが・・・サリンが出来る可能性があります・・・」

サリンという言葉聞いて背筋に冷たい物が走った。そしてこれは容易ならざる敵を相手にしている事を感じた。

サリンとは何年前に狂信的な宗教団体がテロに使用した事がある猛毒のガスであり、一撃必殺の暗殺に使用出来るものと考えられた。

「しまった！天井裏の警備ががら空きだ！」

大統領を暗殺するとすれば銃器による狙撃しか無く、中の様子が見えないクリーンルームの天井からでは狙撃しようがないと思いついていたのが仇となった。そしてクリーンルームの天井裏には監視カメラも無かった。

「今大統領一行はどの辺だ？」

モニターを覗き込む隊員に怒鳴るように聞いた。

「はっ！今、絶縁膜エッチング装置の前を通過中です！」

「おい！松澤、紀平！直ぐにクリーンルームの天井の上に登り様子を見てこい！何かあったら直ぐ連絡するんだ！」と、二人にハンディタイプの無線通信機トランシーバーを手渡して送り出した。

クリーンルームの惨劇

照明設備が無く、何メートルおきかに常夜灯が照らすだけの薄暗いクリーンルームの天井裏に男は控えていた。

周囲にはクリーンルームに清浄空気を供給する大きな矩形のダクトが這い回り、ダクトの先には最終的にクリーンルームに空気を送り込むフィルターファンユニットF Uがゴウゴウと大きな騒音を立てていた。

男は縦横高さ1メートル程あるF F Uに背中を預けクリーンルームの屋根の上に腰を降ろしていた。

背中には送風機のモーターの振動が伝わっており周囲に騒音を撒き散らしていた。

男はクリーンルームの屋根に小さな穴を開け、内視鏡手術で使うようなファイバースコープを差し込みクリーンルームの中の様子を窺っていた。それは普段工場内で機器の点検時に狭くて見えない部分を確認する際に使用する物であった。

男の居るクリーンルームの天井裏からクリーンルームの天井部分までは1メートル以上あ

ったが、ファイバースコープの先端はクリーンルーム内に届き、接眼鏡に目を当てて先端を前後左右に操作させるとクリーンルーム内が見通せる事が確認された。

ファイバースコープは大変細く、クリーンルーム内に突き出している部分はほんの僅かであるので、大統領一行に見つけられる事は無いだろうと思った。

後は、大統領がこの直下を通る時に、サリンをF F Uの中に投入すれば暗殺は完了するはずであった。

恐らく大統領がクリーンルーム内を熱心に見て回っている為か、視察は当初予定より大きく遅れており、男が想定したより10分以上遅れていた。ジリジリと焦る気持ちはあるが今はジッとその時を待つしか無いと自分に言い聞かせるのであった。

サリンはTEOSという液体原料のアンブルに収められていた。

男はアンブルをグッと握り締めた。

アンブルと謂っても医薬品のアンブルの様な物ではなく、ある程度の大きさをもったステンレスの箱の中にガラス容器が納められる構造を持ち、空になったアンブルはTEOSを再充填出来る様になっている。これまで男は工場の人間に見つからないよう製造したサリンをTEOSの空アンブルに詰め空アンブル置き場に隠して置いたのだった。

アンブルの液体取り出し口に繋がれたチューブの一方の端をF F Uに開けた穴に差し入れれば、空気の流れによりアンブル内からサリンは吸い出され、クリーンルームへと放出される筈であった。

そうしている間にも男が覗き込む接眼鏡の片隅に大統領の一群が見え始めていた。

殺すのは大統領だけで良い・・・しかし、今回の暗殺計画では周囲の人間も巻き込むことになるだろう・・・

大統領の視察する経路ではASSの作業員は全て排除されており、大統領に随行するASSの社員も工場長などほんの数名でしかない。祖国の大義の前で最小の犠牲者で済むであろう・・・と、罪の呵責を覚えながら呟いた。

言い様の無い焦燥感に駆られた横川は壁の用品置き場に置かれた^S自給式^C呼吸器^Bを手にして自らの身体に装着し始めた。

SCBAはスキューバダイビングに使うアクアラングと同じような形をしており空気タンクとそれに給気ホースで繋がる呼吸装置からなり呼吸装置は顔全面を被うマスクと一体化している。火災現場での酸欠環境下や噴煙の中で作業する消防士が着用している装備であ

る。

ちなみに SCBA は Self Contained Breathing Apparatus の略であり、SCUBA（スキューバ）とは、Self Contained Underwater Breathing Apparatus の略である。水圧に応じて圧力調整した空気を人間に供給できる機能を持つ物が SCUBA であり、基本的に大気圧の下での作業しか考慮しておらず調圧機能が無い物が SCBA と謂える。

手早く SCBA を装着し終えた横川はもう一セットの SCBA を掴み、トランシーバーを手にする、何かあったら直ちにトランシーバーに連絡する様にと言い残して集中監視室を飛び出した。

薄暗い屋根裏に何やら懐中電灯の明かりがチラチラする。

そしてその光条は男の隠れる方に真っ直ぐ近づいて来た。

横川の命令を受けた松澤と紀平の二人が安全確認に来たのであった。

男は懐中電灯の光りに気付いていたが、大統領の一行の通過を待つため、此所を離れる訳にはいかなかった。FFU 陰に隠れ何とかやり過ごせない物かと息を潜めた。

しかし、懐中電灯の光芒は男の体をさっと捉えた。

「何か居るぞ！」紀平が手にした懐中電灯の光りの輪の中に浮かんだ男の身体の一部を発見して声を上げた。

「大至急横川課長に連絡しろ！」

傍らのトランシーバーを手にした松澤に声を掛けた。

「もしもし！横川課長！・・・」

松澤がトランシーバーに向かって怒鳴る様に声を上げた。

ほとんどトランシーバーを使って連絡する時間も無い内に、物陰から飛び出した男は二人に襲い掛かった。二人は必殺の格闘術を身に着けた男の前に抵抗する事も出来ず倒されてしまった。

自分の足下に意識を失い倒れ伏す二人を冷たい目で見詰めながら男は心の中で思った。

自分が習った格闘術は空手や柔道みたいに技の美しさやキレを追及するモノではない・・・人の命を奪うためのモノだ。本来暗殺という使命を果たすためには二人を確実に殺しておくべきだと思った・・・しかし、殺せなかった。

これまで長年に渡って同じ職場で働き同じ食堂の飯を食って来た仲間としての思い出が瞬間過ぎたのであった。

これから大統領を殺害し、恐らくその巻き添えを食って多くの人が死ぬはずであろうに、俺とした事が心の奥底に甘い所が残っている事に気づいて思わず口の端が緩んだ。

二人は完全に意識を失っている・・恐らく二人は自分の仕事を妨害する事は無いはずだと思った。

再びファイバースコープの接眼鏡を覗くと大統領の一行は間近に迫っていた。

男はサリンを収めたアンプルを握り、其処から伸びたチューブを FFU に差し入れる準備をした。大統領の姿を眼下に捉える事が出来た。

チューブを差し入れようとした手を動かした時、目の前に倒れていた紀平の脚がピクリと動いた。

クリーンルームに急ぐ横川の持つトランシーバーに集中監視室から連絡が入った。

「もしもし、横川課長！今松澤から連絡がありました！」

「それで何と言っている？」

「それが、送風機の騒音が酷くて良く聞き取れないのです・・」

杞憂であって欲しいと願っていた横川の背に冷たい汗が流れ、トランシーバーをぐっと握り絞めた。

大統領のクリーンルーム視察は順調に進んでいた。

大統領の熱心な質問に工場長も丁寧に答えた。

但し通訳の人間が、どの程度技術用語に精通しているか判らないので、どの程度まで正確に翻訳しているか不安を感じていたが。

これまで幾多の暗殺行為に巻き込まれた経験から緊張していた大統領の警護隊員も、クリーンルーム内の順調な動きに警戒心を弛めている様に感じられた。

その時、大統領の前を歩く二人の男が崩れ落ちる様に床に倒れ伏した。

それはまるでトランプで作ったタワーが崩れ落ちる様に音もなく真っ直ぐに下に向かって引き倒される様であった。

突然の事態にその場に棒立ちとなる大統領を工場長が支えて、背後に引き戻した。

その刹那非常扉を破って横川がクリーンルームに飛び込んで来た。

予備の SCBA を抱えて何かを大声で叫びながら走り寄ってきた。

大統領の警護隊員が、クリーンスーツも着用せず作業着のまま突然飛び込んで来た男から大統領を守る様に立ち塞がったが、工場長から彼は安全である事を聞かされて、警備の人間の輪が解けた。

工場長も手伝って大統領に SCBA の^{マスク}面体を付けさせると、横川が入って来た非常口から退

出させた。

SCBA から供給される新鮮空気を吸いながら、大統領一行がクリーンルームから退出したのを確認した横川は、トランシーバーに怒鳴るような声を上げた。

「エバキュエーションプロシージャ緊急脱出指令第一号発令！」

集中監視室で横川の指令を受けた隊員が緊急事態用のスイッチを作動させた。

‘緊急事態発生！緊急事態発生！有毒ガスが漏洩しました。クリーンルーム内の作業者は直ちに最寄りの出口及び非常用脱出口から待避して下さい。’

クリーンルームで使用する有毒ガスの漏洩時に備えて予め録音されている女性の音声が自動的にクリーンルーム内に流れた。

さっとクリーンルーム内を見回して作業員が居ない事を確認した。

大統領の従者が2名グレーティングの床に倒れている事を確認したが、今の横川にはどうする事も出来なかった。慚愧の思いを胸にクリーンルームから脱出した。

ファイバースコープでクリーンルーム内の様子を眺めながら男は暗殺が失敗した事を知った。

「やはり殺しておくべきであったか・・・」

暗殺者は自分の甘さを悔いた。

あの時、紀平の脚がピクッと痙攣するのを見て、焦って一瞬早くサリンを放出してしまったのだった。

それはただの何かの刺激に対する神経の反射反応であった様だ。紀平は今も意識を失って自分の足下に倒れたままであった。

「兎に角此所から逃げなければならない・・・」と、口にすると男は立ち上がった。

逃亡と追跡

「ホットゾーンは第一工場クリーンルーム全体！ウォームゾーンは第一工場建屋内全体！クールゾーンは第一工場外部！コマンドポストを集中監視室に置く！」

人のいない廊下を集中監視室に向かいながら、トランシーバーに向かって矢継ぎ早に指示した。

走りながら大統領は無事であろうかと念じた。

集中監視室で成り行きを見守っていた三村が横川の指示の意味を傍らの ERT 隊員に聞いた。

「ホットゾーンとは有毒ガス漏洩現場とその周辺のことに対応する保護具を装着していないと立ち入れないエリアです。ウォームゾーンとはホットゾーンで作業する人間をバックアップするエリアで通常簡易な保護具を着用します。ホットゾーンもウォームゾーンも我々の様に特別な訓練を受けた者しか入れませんが、クールゾーンは一般の人が居ても安全と考えられる場所です。コマンドポストはこれら危険地帯での作業者を指揮する場所で通常クールゾーンに置きますが、今回クリーンルームの中の状況が判るこの集中監視室を指定したものと思われます。」と、面倒くさそうに説明した。

そうこうしている間にも集中監視室に詰める隊員たちが、工場従業員へ屋外に非難するよう次々と指示を出し、屋外の監視カメラにも大勢の人間が突然の事態に驚きながら工場建屋から逃げ出す様子が映し出されていた。

制服姿の作業員や事務員の他、クリーンルームから脱出したので、クリーンスーツを身に纏ったままの作業員も混じっていた。

この避難する大勢の人混みに紛れて暗殺者も逃げ出したのでは無いかと三村は恐れた。

警察の面目に賭けても犯人は逮捕しなければならない！

集中監視室に向かいながら横川はクリーンルームの循環ファンが回りっぱなしである事を思い出した。

「直ぐに循環ファンを停止しろ！」トランシーバーに向かって叫んだ。

「そんな急に停止しろと言われたって・・・」と、横川の剣幕に圧倒される様に呟いて、循環ファンの遠隔操作盤に手を伸ばした時、

「ありゃ？止まっちゃたよ・・・」

突然クリーンルームのそのエリアを映していたモニター画面が黒くなり、循環ファンの異常停止を報せる赤ランプが点灯した。

「停電だ・・・」

大統領の暗殺未遂や突然の停電など次々と起こる異常事態に呆然として声を上げた。

その時横川が息を切らして集中監視室に戻って来た。

「状況はどうなっている？」

「はっ！現在クリーンルームのそのエリアは完全に停電しております。」

「判った・・・今やサリンはクリーンルーム全体に充満しているものと見られる。Aタイプの保護衣^{P P S}を用意しておけ。・・・まずは松澤と紀平の救難を第一優先とする！」

「私も同行しましょう。周囲にはまだ犯人が居るものと思われます。」

状況が判らず出遅れてしまった三村が申し出た。

「隊長！これを見て下さい！」

監視カメラの記録画面を見ていた隊員が大声を上げた。

何だ？と、その隊員の肩越しに画面を見詰めた。

巻き戻された画面には黒いBタイプの保護衣ースキューバダイビングのダイバーが身に纏うウェットスーツのような形をした、頭から足先までを被う耐化学薬品性のゴム製保護衣ーを身に着けSCBAを装着した不審な人間がクリーンルーム内に進入してくる様子が映っていた。顔は顔全面を被う面体^{マスク}により判らなかつた。

僅かな時間不審者を映しただけで、停電により記録は終了していた。

「犯人はクリーンルームの中に居る・・・」

モニターを見詰めていた隊員たちは呆然と呟いた。

三村も胸に付けた拳銃のホルスターを確かめる様に握った。

「兎に角、今は松澤と紀平の救出が先だ！」決然として横川が言った。

横川や三村も含め十数名の隊員が犯行現場の真上に当たるクリーンルームの天井裏を捜索した。

電源が落ち真っ暗になった天井裏を懐中電灯を頼りに歩を進めた。循環ファンも停止しているため騒音も無く静まりかえっていた。

幾つもの送気ダクトが這い回りクリーンルームにクリーンエアを圧送するフィルターファンユニット^{F U}が林立し動力線が這い回る暗闇の中を苦労して現場まで到着した。

「居ました！松澤と紀平です！」

懐中電灯で照らす先に床面に横たわる二人を発見した。

「松澤！紀平！しっかりしろ！」

思わず駆け寄ると肩を叩いて声を掛けた。

喉元に指を当てて鼓動がある事を確かめた。そして自律的に呼吸をしている事も確認した。

「大丈夫だ！意識を失っているだけだ！」と、ほっとしたように声を上げた。

いまだに意識が戻らずグッタリとした二人が隊員に抱き抱えられている間に横川は懐中電灯の灯りで周囲を確認して回った。

光輪の中にT E O Sのアンブルとそれに繋がったチューブがF F Uの中に伸びているのが判った。

犯人はT E O Sの空きアンブルの中にサリンを隠していたのか・・・と、想像した。

次に光りの輪の中に傍の動力線の高電流用電線のゴム被覆が焼け焦げ内部の導線が一部溶けた状態でむき出しになっている状況が映った。

これだけ酷く焼け焦げていたら新たに電線を引き直すしか修復のしようが無い・・・と、心の中で呟いた。

焼け焦げた高電流電線の束の下には何やら液体が溢れていた。

「ピラニヤ液か・・・」と、呟いた。

「ピラニヤ液？」横に居て懐中電灯をかざす三村が問い掛けた。

「そう・・・ピラニヤのように何でも食い尽くす強酸化性の液・・・濃硫酸と過酸化水素の混合液です・・・恐らく犯人は此所に立って電線の上から濃硫酸を撒き、その後過酸化水素液を掛けたのでしょ。ピラニヤ液はゴムの様な有機物を激しく浸食する。動力線のゴム被覆は厚いからある程度時間は掛かるが、ゴム被服の絶縁が破壊され内部の銅線がむき出しになれば、ピラニヤ液は電気を流す事が出来るのでショートする・・・考えたものだ・・・」
犯人の周到な準備に容易では無い事に思いを巡らした。

どこからその様な勇気が湧いてきたのか判らなかつた。横川は自分で自分の事を暢気な人間だと思っていた。

しかし、自分の勤める神聖な職場で2名の死傷者を出したテロリストに言い様の無い憤りを感じていた。

何としてもこの手で犯人を捕まえようと決意したのだった。

沸々と湧き出る怒りを胸に秘めて、無言でS C B Aを装着した。

「これ以上は民間の人には危険だ！後は警察に任せて下さい。」

横川の決意に気付いた三村が声を発した。

「犯人はどうやらクリーンルームの事情に熟知しているようだ、警察の人にクリーンルー

ムの事が分かりますか？」

鋭い視線で睨み返され言葉を失った。

「そうですね、申し訳ありませんが協力をお願いするしか無いです・・・」

無力感を感じながら、三村が黙々と重い空気タンクを背負っていた。

スキューバダイビングを趣味とする三村には呼吸装置の扱いに自信があったので、SCBAを借り受け、横川達と共にクリーンルームに突入する決意をしたのであった。

本来なら警察官である自分が対応しなければならない事件であるが、クリーンルームという特殊な環境では、一般人の横川達を頼らざるを得ず、申し訳ない気持ちであった。

面体を着け終わり準備が調うと、次にその上からAタイプの保護衣に袖を通した。

AタイプのPPSは当にフナッシーの着ぐるみの様であった。

全体は化学薬品やガスを通さない特殊加工を施された厚い生地で作られており、すっぽりと頭から被る前面だけ透明の窓が付いているが、身体全体を横向けないと振り返って横の様子を見る事も出来ない程視界も制限されるが、サリンという猛烈な毒ガスが充満するクリーンルームに突入するにはこれしか無かった。

装着の終わったPPSの中にサポートの隊員がボンベから空気を流し込んだ。

ブカブカだったPPSが膨らみ始め、本物の‘ゆるキャラ’の着ぐるみの様に膨れあがった。

こうして服の内部を風船のように陽圧にしておく事により、PPSの隙間からガスが入り込む事を防げるのであった。呼吸により排出される息もPPSの中に溜まるので常に陽圧の状態に維持出来るのであった。

危険な任務であったが7名の隊員が犯人捜索を志願してくれた。

横川と三村それと7人の隊員がサリンの充満するクリーンルームに向かった。

危険な戦場に向かうように悲壮感を漂わせて歩き出した7人の背中をウォームゾーンに待機する隊員たちが見送った。

灯りの消えたクリーンルームに入った。

懐中電灯の光りの中に2名のオロギア人の随員が倒れているのが見えた。

駆け寄って様子を見たが、口から唾液を垂らして既に絶命しているのが判った。

「駄目だ・・・死んでいる」

天井を向いてカッと見開いた光りのない目を見ながら呟いた。指先でそっと瞼を閉じさせた。

現場状況をカメラに収めてから2人の隊員に死体を運び出すように命じた。

インカム付の面体を使用しているので分厚いPPSを装着していても相互の連絡を取る事が出来た。

犯人がクリーンルームに入った事は監視カメラの映像から間違い無いが、ホットゾーン即ち事件現場のクリーンルームを取り巻くウォームゾーンにはERTの隊員が待機しており、不審者が出て来たとの連絡は無いので、まだクリーンルーム内に居るものと思われた。さて、どちらに向かったものかと、懐中電灯の明かりを頼りに、横川たちは犯人が逃走したと考えられる経路にそってクリーンルーム内を歩き出した。

クリーンルーム大爆破

その時、横川の耳に連絡が入った。

「こちら集中管理室です！不審者がウェハ準備室にいます！このエリアは動力線が別系統のため停電となっていないので、監視カメラに捕らえられました！」

「何！判ったこれからウェハ準備室に向かう！」

ウェハ準備室には半導体製造の基板となるウェハを製造ラインに投入するための洗浄や前処理を行う施設がある。

「犯人はウェハ準備室だ！」

横川が周囲の隊員に声を掛けた。

第1拡散室と隣接するウェハ準備室に入った。

停電で真っ暗であったエリアから照明に照らされた明るいエリアに入り一瞬眩しく感じた。非常放送により第一工場全部のクリーンルームからは全員待避しているため、人影は無く、クリーンエアの循環ファンも停止しているため辺りは静まりかえっていた。

「原田！犯人は何処に居る？」

面体に仕込まれたインカムを通して集中監視室に詰める原田に連絡した。

「多分、何処かの物陰に隠れているものと思われます！カメラの死角に居るようで見つけ

られません！」

分かった一と、一言答えると隊員の方を向いて、「犯人はまだこの中にいるものと思われる！但し何処に居るか判らない！油断するな！」と、呼びかけた。

横川たちは一団となり周囲に気を配りながらグレーティングの敷き詰められた床を進んだ。通路の両側にはずらりと大型の装置が設置されている。

殺人犯はその装置の間の物陰に隠れているかも知れない。

横川達は慎重に装置と装置の間の隙間を覗いてまわった。

その前方の装置間の物陰に暗殺者は身を潜めていた。

暗殺者の耳に次第にこちらに近づいて来る一団の足音が響いた。

今回の暗殺計画では、暗殺に成功しても失敗しても逃走する手筈は色々準備してある・・・色々を用意したオプションから最適な方法を頭の中で整理した。

その結果、多くの人が傷ついたり、死亡するかも知れない・・・しかし、それは祖国の大義のためには仕方がない犠牲だ！と心に念じるのであった。

横川たちが慎重な足取りで20メートル程進んだ時である。突然、前方に設置された装置の物陰から床にガランと何かが倒れ落ちた。

それは47リットル瓶と呼ばれる窒素ガスを充填したねずみ色に塗装されたガスボンベであった。

突然の出来事に一団は足を止めて身構えた。

床に倒れたガスボンベには電気のコードが補修用に使用するアルミ粘着テープにより貼り付けられていた。

その異様な姿に背筋が凍り付いた。

次の瞬間ボンベが大音響を発して爆発し、巨大な破片が飛翔体となってこちらに向かって来た。

長さが約1.5メートル、直径が25センチ近くある、まるで魚雷の様な形状のクロムモリブデン鋼の塊が、内部に充填された200気圧の窒素ガスを噴出しながら飛来して来たのであった！

「伏せろ！」

横川は大声を上げて床に這いつくばった。

ガスボンベが倒れた時、完全にこちらの方を向いていなかったのが幸いし、直撃は免れたが、高速で飛ぶボンベは周囲の装置に激しく衝突し、破片を撒き散らしバウンドを繰り返しながら頭の上をギリギリ通過した。

自分の両手を見て、次に身体の何処かに痛みは無いか確認して、幸い無傷で在る事が判った時、横川の全身からドッと汗が流れ出た。

「みんな無事か?! 怪我はないか?!」

周囲に蹲る隊員に声を掛けた。

隊員たちがムクムクと起き上がるのを見て、取り敢えず全員が無事であるのが判った。

背後には後ろ半分が無くなったガスボンベの無惨な姿が残されていた。

警戒しながらガスボンベが転がり出て来た装置の物陰に近づいた。

其処には既に犯人の姿は無く、分電盤から伸びた電気コードが垂れているだけであった。

「何があったんですか?」

緊張した声で、三村が問いかけて来た。

「恐らく犯人は、電灯線を直接ボンベ表面に接触させてボンベを加熱したのでしょう。アルミや銅の様に電気抵抗の低い金属に電線を直付けすれば、ブレーカーが落ちますが、ボンベのクロムモリブデン網は抵抗が高いのでブレーカーは落ちず電気を流し続ける。しかし、抵抗が高い分発熱も大きい。表面が高温になってボンベの中の圧力も上昇し、口金部分のクロモリ網とガラスの接合部が追いつけず、内部の高圧窒素が噴き出したのでしょう。」

横川には、これまでの事態から犯人はクリーンルームの設備に熟知していることが感じられた。もしかしたら犯人は内部の人間? 自分はこの工場の間人はほとんど知っている。そんな大それた事を起こす奴が居るとは信じられないと、心に浮かんだ不吉な予感に首を振った。

「まだ犯人はこの辺にいる筈だ! 犯人はクリーンルーム内の設備に熟知している様だから油断するな! 次にどんな攻撃を仕掛けてくるか判らんぞ!」

容易ならざる敵と対峙している事を改めて自覚して隊員に声を掛けた。

「居たぞ! あそこだ!」

隊員の一人が指差した。

まるでスキューバダイビングのウェットスーツの様な黒いゴム製の防護服^{P P S}を身に着け

SCBA の空気タンクを背負い面体を被り、手に何か黒い鞆のような物を持った不審者が走り去るのが見えた。

隊員たちは、待て！と叫んで不審者の背を追いかけた。

逃げる者と追う者の靴音が静寂のクリーンルームの中に響いた。

三村も胸のフォルスターから拳銃を取り出して追跡しようとしたが、厚い防護衣の下に在る事に気付き舌打ちをした。

今は素手で追いかけるしか無かった。

不審者は動きが容易の B タイプの防護服を着ており、こちらは重くて身動きのし難い A タイプの防護服を着ている。

動きの違いは歴然で、走り去る犯人の姿が段々と遠くなっていった。

犯人の背を追いながら、「こちらは着ぐるみの様な防護服でどうしても動きが遅い。逃げようと思えば幾らでも逃げる機会は在った筈なのに、まるで鬼ごっこをしている様にチラチラと我々の前に姿を現すのは何故だろう・・・」と、訝^{いぶか}った。

「居たぞ！あそこだ！」隊員の一人が指差した。

ちょうど階下の機械室に降りる階段のとば口に立っていた。

追跡する我々に気付いたのか、ちょっとこちらを振り返ると、そのまま階段を駆け下りていった。

「待て！」と、三村や隊員が後を追おうとした。

その時、横川の目には停止していたはずの最新のロードロック付きエピタキシャル成長装置の電源が入り動いているのが映った。

「糞！EMOが効かない！」駆け寄って非常停止ボタンを押したが電源は落ちなかった。

犯人により、何か細工をされていたのだ。

「みんな！追うんじゃない！罨だ！」と、追跡しようとする仲間の腕を掴んで大声を上げた。

横川の叫びを聞いて全員立ち止まった。

「みんな直ぐに逃げるんだ！全員待避！」と叫んで元来た方向に走った。

装置の操作モニター画面に映し出された情報では、後数秒で次のステップに移行するはずであった。

それは、一恐らく 1200℃の高温下で毎分数十リットル流れる水素ガスに酸素ガスが混

入される！と、犯人がプログラムしたものと予想された。エピ装置には酸素を送り込む配管は無いが、これだけ半導体製造に熟知した巧妙な犯人ならそれぐらいの細工はするだろうと予想した。

エピタキシャル成長装置は高温下で水素ガスとシリコン塩化物のガスを反応させる装置であるが、全ての原料ガスが反応して無くなって仕舞う訳では無く、かなりの部分は副成物となり装置や配管内に付着して蓄積されて行く。そしてこの副成物は非常に不安定で水や空気との接触により爆発的に反応する可能性があるのだ！

古いタイプのエピタキシャル成長装置では装置を開ける度に周囲の空気が装置内に流れ込み、付着した副成物も空気や空気中の水分と反応して失活―活性を失うが、最新のロードロック式装置では空気と触れる事が無いため、失活する事無く、危険な副成物がどんどんと堆積して行くのだった。装置導入の検討時に横川が懸念を持った点であった。

頭の中で残りの秒数を数えていた横川は、最早時間の無い事を知り、「全員伏せろ！爆発するぞ！」と、叫んだ。

その時、地響きするような轟音と共に、背後で真っ赤な炎が上がり、灼熱した爆風が床の上に伏せた隊員たちの背中を通り過ぎた。

エピタキシャル成長装置から始まった爆発は、引き回された排気配管内に厚く堆積した爆発性副生物に引火し、更に地階に設置された配管に繋がる真空ポンプも爆発させた。

爆風で床のグレーティングは捲れ上がって宙を舞い、装置の破片が飛び散った。

サリンガスの影響を避けるため工場建屋から屋外に待避させられていた社員の見守る前で地震の様に地面が揺れ空気が震えた。

激しい爆発音と共に工場外壁を破って炎が飛び出し、破片が周囲に舞い散った。

悲鳴を上げて逃げ惑う社員がふと振り返った時、工場建屋の外壁に開いた亀裂から煙が表に流れていた。

「中で一体何が起こっているんだ?!」

建屋から立ち上る煙を見つめながら声が上がった。

余りの事態に、床に伏せたまま暫く気を失っていたのかも知れない。

ふと目を開けると変わり果てたクリーンルームの惨状が映った。

動力線も吹き飛ばされて、電灯の消えたクリーンルームに筋を描いて表の光りが差し込んでいた。工場の外壁まで破損して裂けてしまっていたのだった。

エピタキシャル成長装置の置かれていた部分は床面からして全てが無くなっており、周囲の装置も吹き飛ばされて横転するか、著しく破損していた。

「オイ！大丈夫か？しっかりしろ！」

傍らで伏す隊員の身体を揺すった。

防護服の表面は焦げたり、破片を受けて傷だらけであったが、厚い生地のお陰で深手を負ってはいないようであった。

横川に声を掛けられ意識を取り戻したようであった。

周辺でも意識を取り戻した隊員が呆然としてフラフラと立ち上がっていた。

「大丈夫ですか？」

三村が声を掛けてきた。

幸い彼も無傷の様で在った。

「凄い爆発でしたね。・・・犯人は逃げられない事を悟って自爆したのでは？」

「まさか！奴はそんなヤワな男ではない。さあ、出ましょう！いずれにしても奴はもう此所には居ない・・・」

横川はそう言い切ると、周囲の隊員を見回し、

「要救助者の確認と救護が完了次第、撤収する！」

と、号令を掛けた。

怪我を負って自力で歩けない隊員は仲間の肩を借りて撤収した。

幸い死亡者や重傷者はいない様で在った。

工場棟の屋上には製造ラインを下支えする色々な設備や機器が設置されている。

クリーンルームから伸びた縦横80センチはありそうな矩形の排気ダクトが幾つも走っている。

今その中の排気ダクトの点検口の留めネジが内側からゆっくりと回り始めた。

点検口をいっぱい押し開き内側から、黒いゴム製のウェットスーツに似た防護服を身に纏った男が這い出て来た。

男の体が完全に排気ダクトから抜け出した時、男は自分が遠巻きに取り囲まれている事に気付いた。

ASS の作業服を着た男達—ERT の隊員達であった。

その中には横川と拳銃を構えた三村の姿もあった。

男は観念したのか静かに^{マスク}面体を取り去り、頭部を覆っていたゴム製のフードを脱いで、汗に塗れた髪を拭うように頭をさっと振った。

その下から現れた顔に ERT の男達から驚きの声が上がった。

「オオ！サワだ！」

「サワだ！サワだ！」

と、口々に叫んだ。

「澤！やはりお前だったか！」

横川が、睨み付ける様に言った。

「横川さん、アンタには散々世話になっておきながら、こんな事をして申し訳ないが、俺は元々オロジアの潜入工作員だったんだ。悪く思わないでくれ・・・」

男は同じ ERT 隊員に取り囲まれても毅然とした様子で応えた。

「澤！次はどうするつもりだ？表の燃料タンクでも爆発させてみるか？澤、お前は銃を持っていないんだろう？持っていたら最初から使っていた筈だ！大人しく降伏しろ！」

と、丸腰の澤に声を掛けた。

「次か？次はこれだ！」

と、不敵な笑みを浮かべて、隊員たちに向かってアタッシュケースの様な鞆を突き出した。

「これはオロジアの核ミサイルの発射ボタンだ！それ以上近づくとボタンを押すぞ！」

鞆を開けてその内側を見せた。

澤が暗殺に失敗した後、サリングガスの充満した危険なクリーンルームに侵入したのは随行員が持っていた核ミサイルの発射装置を手に入れるためだったのだ！

発射ボタンを押せば直ぐに核ミサイルが発射されるのか否かは横川には判らなかったが、一步間違えれば世界戦争にもなりかねない。

どうする事も出来ず澤を遠巻きにしたまま立ち尽くすしかなかった。

「直ぐにヘリコプターを用意しろ！俺はヘリの操縦も出来るからな！追跡してきたら何時でもボタンを押すぞ！」

澤の要求に流石の三村も手出し出来ず、拳銃を構えたまま唇を噛んだ。

「押したければ、押せ！そんな物はただのハリボテだ！今のオロジアにはそんな力は無

い！」

と、背後でオロジア語で怒鳴る声が聞こえた。

振り返ると屋上に登って来たカミンスキー大統領の姿が在った。

「諦めろ！シュワルコフ大佐もピョートル大佐も全員逮捕されたぞ！」

と、威厳のある声で怒鳴った。

糞！と、一言口にするると発射装置の鞆を床に叩き付け、走り出した。

「待て！」

横川達は、逃げる澤を追い掛けたが、それより早く澤の体は屋上のフェンスを越えて死に向かってダイブしていた。

エピローグ クリーンルームならではの奇跡

事件から一週間ほど経ち、再び三村が横川を訪問していた。

「今回の件では、警視総監賞が授与される事が決定しましたので、お知らせに来ました。」

「有り難う御座います。これで怪我を負った内の隊員達も喜ぶ事でしょう。」

「犯人の澤ですが、ビル6階に相当する高さから飛び降りましたが、途中植栽に引っかかった事もあり、重傷を負っていますが、命には別状無い様です。意識も取り戻し、少しずつ自供を始めています。」

一緒に働いていた時の明るく真面目な好青年だった澤の姿が目に浮かんだ。

こちらも命の危険に脅かされたとはいえ、生きていた事を知り少し安心したような気持ちとなった。

「犯人の本名は‘伊 東光’オロジア名は、私には正確には発音出来ませんが・・・‘グアンイェー’オロジア国内に住む少数民族で人種的に日本人に非常に近いため、顔だけ見ると日本人と見分けが付きません。そのため日本への潜入工作員としてスカウトされ教育されたようです。」

「そうでしたか・・・」

「ところで、私には今回の件で判らない事が幾つか有ります。先ず、何故犯人が屋上に一特にあの場所に現れる事が判ったのですか？」

「クリーンルーム内の空気は大変清浄で温度や湿度もコントロールされています。このような空気は最初は外気から取り込んで作るのですが、濾過して除塵して加湿して温度を調整して一等々、大変お金が掛かります。このような高価な空気を捨ててしまうのはもったいないので、クリーンルームの天井から放出した空気は、階下で回収され、再びフィルターファンユニットを通して天井から放出すると、循環して使います。

しかし、何時までも循環したままでは、中の作業員の吐いた炭酸ガスが増加し、反対に酸素は減少してしまうため、一部の空気を捨てて、その分新しい空気を補充するのです。

排気のための空気の取り入れ口は数カ所ありますが、澤・・イェーですか？が、最後に向かったエピタキシャル成長装置の設置された地下の機械室にこの排気の入力口が在ったのです。排気はダクトを通して屋上に設置された排気ファンから排気されます。恐らく我々が先回りしなければ、爆破の混乱に乗じて逃走するつもりだったのでしょうか？」

「そうですか・・判りました。」

非常にかい摘んだ説明のため、何処まで理解出来たか心配する横川であったが。

「ところで、もう一つの疑問ですが、今回随行員の二人はお気の毒にサリンガスを吸い、即死してしまったのですが、随行員から1メートルと離れていなかったカミンスキー大統領が無事だったのは何故ですか？」

「ああー、あれは奇跡でした。まさにクリーンルームならではの奇跡と言って良い・・」横川は呟く様に言うと、軽く目を閉じてから、

「ご存じの様にクリーンルームは大変塵を嫌う。目に見えない様な微細な塵埃でも製品を駄目にしかねない。しかし、人が中で動けば塵の発生は防げないものです。そこで発生した塵が周囲に撒き散らされないように、上から下への空気の流れを作って、発生した塵がその空気の流れに引かれて周囲に拡散せず、足下から吸引されるのです。完全層流型といいますが、当社のクリーンルームでも複数在る天井のFFUから放出されたクリーンエアは上から下へ層を作って流れています。

空気の流れを目で見れる人間はいませんが、もし見えたとしたら、空気の筋が乱れる事無く糸を引く様に上から下に流れ落ちるのが解る事でしょう。

サリンは重いガスで拡散性が悪い。犯人が放出したサリンはこの空気の流れに沿って真っ直ぐ下に降りて行ったのです。

この際に犯人は松澤と紀平に発見されて、焦って一瞬早く放出してしまったのでしょうか。

不幸にも随行員の二人は、犯人がサリン放出に使ったFFUの空気の流れの真下に居合わ

せたが、大統領はまだこのFFUの範囲に居なかった。工場長が大統領を押し止めたのも機敏な判断でした。」

「そうですか・・・」

三村は、歩速によるコマ数秒の間隔が生死を分けた事に感銘を受けたように呟いた。

「ところで、私のも判らない事が在るのですが・・・」

今度は逆に横川が三村に質問した。

「何ですか？」

「何度も暗殺の危機に瀕したカミンスキー大統領は、自分にそっくりの影武者を何人も用意していると聞きました。そうするとクリーンルーム内を視察していた大統領は本物の大統領だったのか？最後に犯人を一喝した大統領は影武者だったのか、しかし、あの威厳に満ち、犯人を屈服させた堂々とした姿は影武者とは見えなかったが、全部本物だったのか？・・・」

「我々には窺い知れない事は在るもんですよ・・・」

と笑みを浮かべて一言言うと、三村は椅子から立ち上がり横川の肩をポンと叩いて、応接室を後にした。

クリーンルームの暗殺者 完

この作品は全てフィクションであり登場する国名、会社名、氏名は架空のものです。

ところで ass って、どんな意味か知ってますか？